



西日本新聞 文化欄

1988 年九月二十六日~十月八日

### 闘争心かきたてられ

「九州派は過去のものではない。今の僕の制作姿勢の中に生きている」。九州派誕生時からの主要メンバーだった石橋泰幸は、地塗り途中のフェルトを広げた六畳のアトリ エで語る。

「日韓現代絵画展では韓国の作家と交流を深めながらも彼らと闘っているし、新しい素材への挑戦も続けている。それに、桜井さん(孝身・フランス)や菊畑君(茂久馬・福岡市) オチ君(オサム・同) らが頑張っている。彼らをライバルと思い続けてきたから、会社をやめて貧乏覚悟で絵一本の道を選んだ。九州派は解体しても、彼らの存在が今も僕の闘争心をかきたてるのだ」

いつもは物静かな「タイコーさん」だが、九州派の話になると闘志をむき出しにする。他のメンバーと違って、アルコールを口にしないで語るから、よけいに迫力がある。

### 日韓現代美術展で

九州派が生まれる前、高校卒業後間もない二十七年から 三年連続して二科展に入選している。今よりずっと”入選”が貴重な時代。二科西人社を主宰する久留米市の故伊東静尾に師事して、将来を嘱望されていた。エリートの世界を捨てて九州派を選んだのは「入選を目指すには表現を抑えなければならない。九州派では制約がなかったし、互いにシビアに作品をぶつけ合う真剣勝負の勢いがあった」からだ。

九州派の歴史は闘いの連続だった。相手は、芸術、権力、中央だけでなく仲間たちでもあった。作品に対して峻烈(しゅんれつ)な批評が飛び交った。「闘いがなくなった時、絵がダメになる」と信じる石橋にとって、そんな九州派はかえって居心地の良い場所だった。

その延長が、今年で八回目を迎えた日韓現代美術展だと言う。九州派時代の仲間、山内重太郎(福岡市)とともに第一回展から参加しており「西洋とは違う東洋独自の空間を探る場なのだが、

全世界の目を韓国に引きつけようとする彼らの意気込みはすごい。彼らを乗り越えなければ」.

### ライバルを意識

九州派が解体期にあった四十三年に勤務先の西日本鉄道を退職した。「勤めながら中途半端に絵を描くより、絵かきとして生きたかった」 当時三十八歳。幼い子供を二人抱えていた。空前の絵画ブームが来るのはずっと後のことで、地方の抽象作家の作品など売れる時代ではない。退職に反対する夫人を「男がいったん決めたこと。貧乏しても食わしていくけん」と懸命に説得した。

「九州派時代には、展覧会のたびに給料を全部はたいていたから、貧乏には耐えられる自信があった」とは言うが、なまはんかなことでは大企業の職を捨てられるものではない。

ケジメをつけさせたのはライバルの存在ではなかったか。そのころ、菊畑はルーレット・シリーズで中央の美術ジャーナリズムに注目されていたし、桜井とオチは渡米していた。サンフランシスコでの第三回九州展のパンフレット編集をたのまれた石橋に焦りが生じたとしても不思議はない。三人は美術だけに賭(か)けているのだ。

退職して、福岡インターナショナルスクールや絵画教室で教えたり、比較的売れそうな、きれいな水滴の絵を描いたりもするが「生活費の大半は女房に稼いでもらった」のが実態で、そんな状況の中で色彩や構成の美を追い続けた。第一回現代日本美術展(四十六年)など各種のコンクール、グループ展に出品したり、個展を開いておびただしい作品を作った。

### 素材と一体になる

ある時期、九州派のトレードマークは、コールタールやアスファルトを使った「黒」だった。コールタールを最初に用いたのが石橋である。新しい素材と向き合う時には、期待と同時に不安があるが「マンネリから逃れて作っているという実感がある」のが魅力だ。

ペンキやラッカー、むしろなど手当たり次第に画材にした九州派以降も、カンバス、ベニヤ板、燃やしたり重ねたりした新聞紙、食パン……

「九州・可能性への意志」展(四十八年八幡美術館)では実物のアスファルト舗装の断片に着色して道路に並べたこともある。

今はフェルトをコテで焼く仕事もしている。「素材の持つ強さを生かし、自分と一体にしようとしているが、それは九州派時代と同じだと思う」と言う。昨年、韓国の抽象作家、崔明永とソウルで二人展を開いた。「東京に殴り込んだ時と同じ意気込みだったね」と笑う。

この十数年「白の平面空間」と取り組んできたが、今年の個展では「黒の平面空間」を発表した。原初的な「白」と最後の色「黒」とで、独自の東洋的な空間を作ろうとする。「絵巻や巻き紙の書状のような抽象世界も作りたいね」。九州派の気分で生きる 男は意気盛んだ。

